



→背景は、一月二十四日の雪化粧をした銀杏です。

夢の色重ねて清か青写真

さや

一月二十六日、「平和な社会をつくるために紛争地でのお仕事紹介」と題して、内閣府 国際平和協力本部事務局研究員の山田彩乃さんからお話を聞いた。低学年にも分かりやすく紛争とその原因を説明してくださり、平和な世界をつくるには、「知ること、助けること、仲良くすること」が大切だと語ってくださいました。

山田さんは、約十二年前に青年海外協力隊の一員としてザンビアのコミュニティ開発に携わった。帰国後に復職するも、「人の役に立ちたい」「世界にある不平等を少しでも解消したい」という小学生の頃からの思いが募り、発展途上国の問題解決に直接取り組みめるNGOに転職。南スーダンで平和構築事業を担当された。そこでは、国内避難民キャンプで誰にどんな支援をするのか慎重に検討したり、現地のコミュニティのリーダーとじっくり相談したりして信頼関係を築いた。そのために半年で現地の言語を何種類も習得し、現地スタッフと支援の内容について納得してもらえらるまで説明したそう。相当の苦勞がしのばれるが、現地の人と諸団



体で一つの目的を達成したことに、大きな意義を感じたそうである。その後、「もっと役に立つ人材になりたい」と、専門性を高めるためにイギリスに留学。移民学修士課程を修めた後、JICAのケニア事務所所属し、ソマリア平和構築担当として活躍された。ソマリアでは、国際協力に関わる複数の省が異なる見解をもっており、その溝を埋めることから始め、ようやく支援計画にこぎつけたとのことである。この経験から、「利害関係がなく、先入観にとられない第三者だからこそできることがある」と実感されたそう。そして、現在は内閣府国際平和協力本部事務局研究員として、東アフリカの現地に赴いて活動したり、日本の大学や海外に派遣される自衛隊員に向けて講義をしたりしている。二月十六日からウガンダでの勤務が始まるとのことである。

今回、山田さんを常磐東小学校にお招きできたのは、山田さんの中学校時代の恩師が伊奈教頭先生だからである。子供の頃の山田さんは、友達から好かれる一方で、本当にしたいことを口に出せないところがあつたらしい。まさか、日本の中枢で、世界の難問の解決に向けて活躍する大人になるとは、想像をはるかに上回る成長ぶりであろう。子供の可能性は測り知れない。

山田さんとの会話中、「もっとできる」「もっと」という言葉をよく耳にした。常に向上心を持ち、それが現在も進行中なのだ。こうなつたらよいと思うことができないと「悔しい」と感じ、実現のために自分は何をすればよいかと未来を思い描いて行動する。その姿は、常磐東小学校の校訓「求めて励む」を体現している。

意見の異なる相手でも尊重し、現地の願いを聞いて粘り強く調整し、公平にふるまう日本人は、世界から一目置かれ、信頼されていると肌で感じるそうである。東っ子もそんな誇らしい素養を身に付け、どこでも人から信頼され、活躍できる人に育ってほしい。